

もっとずっと好きになる 天草西海岸ストーリーブック

海が、自然と文化と暮らしをつなぐ場所



もっとずっと好きになる。天草西海岸のストーリーブック【第1版】
(五和・天草・河浦・牛深エリア編)

発行：天草市観光振興課

〒863-8631 熊本県天草市東浜町8-1

TEL0969-23-1111

発行日：2026年3月

【第1版】

天草西海岸では、海が大地をかたちづくり、そこに暮らす人びとの文化や営みも育んできました。地質、祈り、商い、そして日々の暮らしの物語をたどると、この海岸線に、自然と人の歴史が長い時間をかけて織り重なってきたことが見えてきます。このストーリーブックは、天草西海岸をもっとずっと好きになるための、小さな旅の入口です。

目次

- 1 大地と海の物語
- 2 祈りの物語
- 3 人と暮らしの物語
- 4 海と商いの物語
- 5 食の物語

天草西海岸ストーリーを、 もっと深く。

この冊子で紹介した天草西海岸の物語をオンラインでも。ストーリーづくりの取り組みや、冊子のフル版PDF、映像、イベント情報などを随時発信しています。



天草西海岸ストーリーマップ
Amakusa West Coast Story Map



天草西海岸ストーリー
Amakusa West Coast Stories



キラキラ、シマシマと
表情を変える地層や奇岩
そして夕映えの水平線に重なる島々が
“地球の記録”を今に語りかけている。

天草西海岸に広がるのは、1億数百万年～7,000万年前(白亜紀後期)から刻まれる大地の記録です。現在の断崖の多くは当時、浅い海と河口が交わる環境でした。キラキラと輝く鉱物の結晶や、シマシマに重なる砂岩・泥岩の互層は、海底に運ばれた堆積物が長い時間をかけて固まった証です。姫浦層群軍ヶ浦層(約8000万年前)や下津深江層(約7400万年前)からは、ティラノサウルス科の歯やハドロサウルス科の足跡といった恐竜化石が出土しています。肉食や植物食の恐竜が歩いた大地は、隆起と沈降、そして東シナ海の波浪が長い年月をかけてもたらず侵食によって削られ、「ぞうさん岩(穴の口岩)」や「大ヶ瀬・小ヶ瀬」といった海食崖や海食柱の風景へと姿を変えました。牛深の法ヶ島にある獅子吼岬は約300万年前の長島の噴火活動で火山灰や石などが堆積し、風化侵食されて生まれたものです。天草西海岸は、1億年を超える大地の壮大な物語を伝えるエリアです。

ストーリーを伝える、おすすめの場所や体験

・妙見浦(穴の口岩) ・大ヶ瀬・小ヶ瀬 ・牛深海域公園のグラスボート ・カヤック ・SUP ・ダイビング



入り組んだ地形がつくる海の環境は
山の養分を蓄えて“海藻の森”となり
多様な生命が寄り添い
めぐる、島の暮らしを支えている。

リアス式海岸と3つの海(島原湾・八代海・東シナ海)が交わる天草西海岸には、サンゴ礁と“海藻の森(藻場)”の境界線が存在しています。照葉樹林が緑のダムとして機能し、栄養塩たっぷりの水が注ぎこむ羊角湾の干潟には、ヒメアカガイやビョウブガイといった希少種も生息し、真珠やヒオウギガイの養殖が行われています。有明海の出入口にあたる早崎海峡では、縄文時代からイルカを代表とする様々な生き物が同じ海を分かち合ってきました。東シナ海に面したエリアでは、黒潮によってやってくる大型回遊魚や熱帯魚の姿も見られます。多様な沿岸漁業が営まれ、流通魚種は250種以上に上ります。青魚を海水で茹で、広葉樹で燻して保存性と味わいを高める雑節は日本一の生産量を誇り、島内外の食文化を支えています。イルカウォッチングや製塩見学、漁業体験や食体験は、山・里・海が循環し、人がその一部として生きてきた営みに触れるひとつの入口です。

ストーリーを伝える、おすすめの場所や体験

・早崎海峡のイルカウォッチング ・広葉樹で燻す雑節 ・希少生物を育む羊角湾の干潟 ・天然海塩



教会と神社の参道の交わりは 密かに続いた祈りや 異なる信仰を認め合った 共生と寛容の風景である。

天草西海岸では、幾重にも重なる「祈りの風景」を垣間見ることができます。江戸初期から明治初期までの約250年に及ぶ禁教期、漁村ならではのひと工夫で信仰が守られました。貝殻に浮かぶマリア様を拝み、柱の中に十字架を隠すなど身近なものを信心具として代用し、やがて互いを支え合う精神が育まれました。崎津集落では、絵踏が行われていた庄屋役宅跡に教会が建てられました。教会のすぐそばには、禁教期に表向きは神道を装いながら信仰を守ったといういわれのある神社も現存し、潜伏期に紡がれた漁村独特の信仰継続を示す集落として、世界文化遺産に登録されています。大江では禁教令の撤廃後、慈悲深いペアテルさん(ガルニエ神父)が信徒とともに教会建築に尽力し、信仰と教育を支えました。明治40年には、与謝野鉄幹・晶子、北原白秋ら五人の詩人がペアテルさんを訪ね、その体験などを紀行文『五足の靴』に記すことで、天草の文化を世に解き放ちました。

ストーリーを伝える、おすすめの場所や体験

・世界文化遺産 崎津集落 ・五足の靴文学遊 歩道 ・大江教会 ・高浜ぶどうと高濱ワイン



天草は、南蛮との交流でもたらされた
信仰や学び、言葉や食が、
在来の島の暮らしと入り混じる
文化の交差点である。

天草のキリシタン文化は、鉄砲が伝来した16世紀頃に始まりました。戦国時代、天草五人衆と呼ばれる有力者たちが、キリスト教を受け入れ、学び、理解する過程を通して、海を越えた南蛮との交流を拓いていきます。1591年には、日本で唯一の宣教師養成機関「コレジヨ(大学)」が天草へ移され、天正遣欧使節(※)がヨーロッパから持ち帰ったグーテンベルク印刷機で「天草本」が刷られました。今でもなじみのある『伊曾保物語(イソップ物語)』や『平家物語』などが1500部以上も印刷され、世界と肩を並べる出版事業が400年前の天草で行われていました。南蛮との交流は、木綿の模様布(更紗)や食、言葉などももたらしました。ポルトガル料理のタコのリゾットがルーツとなったという説もある「タコ飯」や、「ぼうぶら(カボチャ)」「南蛮柿(イチジク)」など、海の向こうから届いた異国の文化は島の風土と混じり合い、暮らしに根付いています。

ストーリーを伝える、おすすめの場所や体験

・天草コレジヨ館 ・活版印刷体験 ・南 蛮古楽器 ・イチジクなどを使った食体験



街明かりの少ない天草西海岸には、
星が瞬く風景や
四季折々の手しごと風景など
ゆっくり流れる“島時間”が残っている。

「天草諸島」は約120の島々からなり、美しい多島海景観が広がっています。1966年に天草五橋によって結ばれ、今では陸続きの半島ですが、西海岸には今でも色濃く“離島の情緒”が残ります。サンセットラインを走れば、海へ移ろう夕陽や月が、山や瀬を水彩画のように浮かび上がらせ、こぼれ落ちそうな星空や静かな月明かりに包まれます。晴れた冬の朝には「気嵐(けあらし)」が漁村を幻想的に彩ります。崎津のトウヤ、下田や通詞島のセドヤ、牛深のセドワといった港町独特の細い生活路に代表される半農半漁の街並みは、互いを思いやる心や寛容さを今に伝えます。今も漁師の営みは月の暦に沿って行われ、軒先・庭先、海辺には季節ごとに干しダコやワカメが風に揺れています。魚の開きや大根、こっぱ(輪切りにして茹たサツマイモ)の天日干しなど、人の手仕事も風景の一部となっています。天草西海岸は、人が自然と同じリズムを刻む「島時間」に浸れる場所です。

ストーリーを伝える、おすすめの場所や体験

・「あまいち」&旧道のサイクリング ・港町の細い路地 ・トワイライトタイム～星空観察 ・暦とともにある漁師の営み



良いことも悪いことも授かりものとして 受け容れる「のさり」の精神は 天草に住む人の寛容さと 不屈の心を育んできた

天草には、良いことも悪いこともすべての境遇を“天からの授かりもの”として受け容れる「のさり」の精神があります。自然と共生してきたこの土地に根づく、前向きで受容的な心やしなやかな強さを表す言葉です。平地も少ない暮らしの中で、人々は山と海の恵みを分かち合いながら生きてきました。助け合いの営みは、崎津と今富を結ぶ行商「メゴイナイ」の姿からもうかがえます。江戸時代には、福連木で樫が幕府の御用材となり山の利用が制限されたため、幼い子どもが五木などの山間部へ住み込みで働く子守奉公に出ました。故郷を離れた哀しみや苦しみを分かち合う「福連木の子守唄」も、この土地に根づく受容の心を今に伝えています。また、島原・天草一揆の後には各地から移民を受け入れてきた歴史があり、人々が身を寄せ合い、交わり、支え合って暮らしてきました。よそ者も「よかよか」と懐深く迎え入れる風土は、今も天草の暮らしの中に息づいています。

ストーリーを伝える、おすすめの場所や体験

・西平椿公園の椿の営み ・漁村の風景 ・漁師町の干物づくり ・福連木の子守唄



沸かさず、さまさず、源泉かけながし
大地の熱を分かち合う天草最古の下田温泉は
大きな家族のような絆を育む
“地域の文化財” である。

下田温泉は1300年代頃、1羽の白鷺が河原で傷を癒している姿から発見されたと伝えられます。温泉といえば火山のイメージがありますが、「非火山性」の温泉で、白亜紀に堆積した地層「姫浦層群」の中に雨水が長い時間をかけて染み込み、地中で温められて湧き出します。地下は100m深くなるごとに約3℃ずつ温かくなるといわれ、地層のたわみや下津深江断層で生じた亀裂が、湯を地表へ導く通り道となりました。自然に湧き出す湯を利用し、河原の小さな湯壺で入浴していた時代もありますが、現在は250mの深さまで掘った泉源から50度の湯が湧き上がり、温泉街の各施設で“沸かさず、さまさず、源泉かけながし”の温泉を楽しむことができます。1963年に国民保養温泉地に指定され、“むらゆ”と呼ばれる共同浴場は、まちの暮らしの一部になりました。天草小唄や下田温泉小唄、五足の靴などにも謳われた下田温泉は、人々をつなぐ“地域の文化財”です。

ストーリーを伝える、おすすめの場所や体験

・下田温泉 ・下田温泉センター白鷺館 ・下田温泉五足の足湯 ・下田温泉小唄



孤独や困難を覚悟し、
未知の海へと漕ぎ出した人々の
チャレンジスピリットが、
天草を今につないでいる。

江戸時代、島原・天草一揆ののちに「天領」となったこの地は、幕府の統治のもとで再建されていきました。近代になると、人々は海を越え、世界へと活路を求めます。日本人女性で初の医学博士となった宇良田唯もそのひとりです。女性の学ぶ機会が限られていた時代に、志を抱いて国内外で学び、知識と技術を社会に還元しました。マダガスカルでホテルやレストラン・映画館の経営に成功した赤崎伝三郎は、日露戦争の折、ロシアの艦隊の動向を祖国に伝え、遠く離れた地から日本を支えました。また、15歳で志を抱いて渡航した松下光廣は、やがて商社を設立し、ベトナムの近代化に大きな影響を与える存在となりました。また、富を求めて天草や南島原から海外へ渡った、からゆきさんと呼ばれる女性たちの歩みも含め、孤独や苦難を背負いながら懸命に生き抜いた姿は、地域の歴史の1ページです。強さと忍耐、未来を信じて進む心が、この地を今へとつないでいます。

ストーリーを伝える、おすすめの場所や体験

・旅館白磯(国登録有形文化財) ・遠見稻荷山 展望所 ・漁業資料展示室 ・宇良田唯記念碑

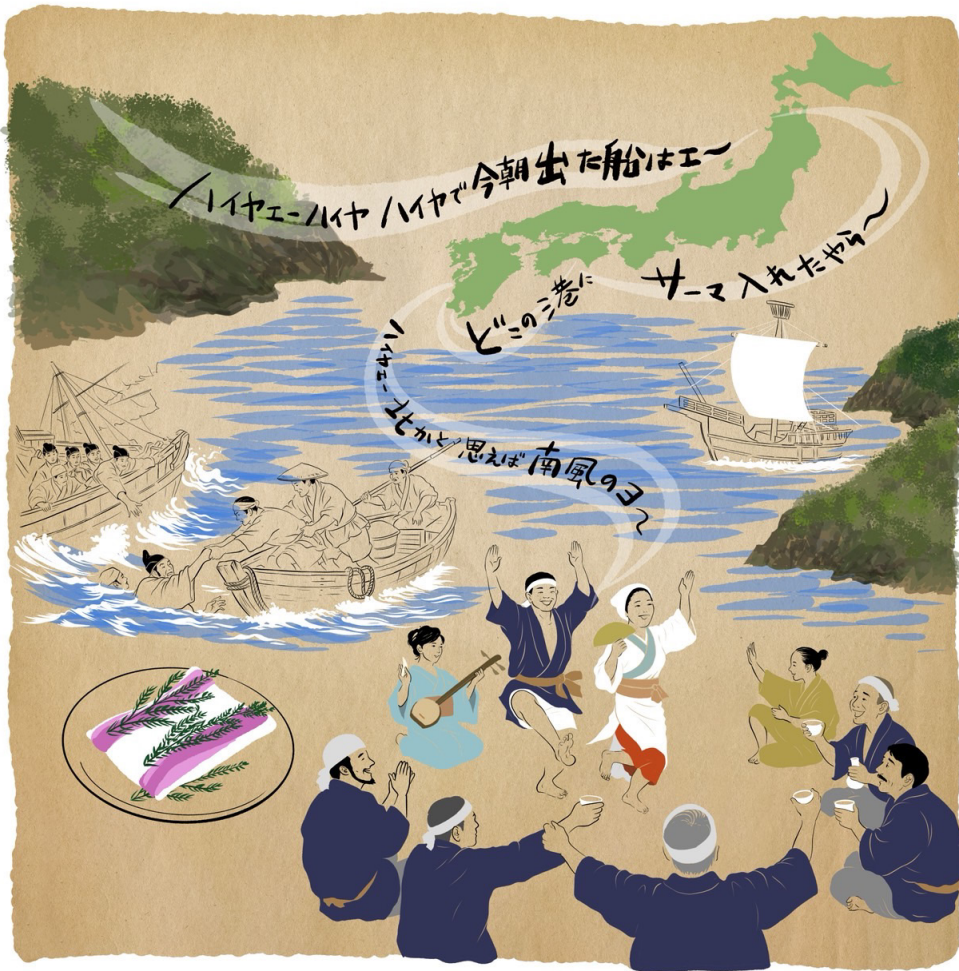


天草西海岸の白い岩肌が 長く日本の磁器文化を育み 阿蘇の噴火由来の御領石や 無煙炭は島のくらしを支えてきた。

天草西海岸の鉱脈では「天草陶石」が採石されます。日本列島が形づくられる過程で起きた地殻変動により生じた流紋岩は、湧き出した熱水により鉄が取り去られ、白さと透明感を備えた磁器の原料が生まれました。17世紀以降、その価値は全国に広まり、海を越えて、有田焼や波佐見焼、三河内焼など各地の磁器づくりを支え、現在も国内生産量の多くを占めています。平賀源内が「天下無双の上品」と称えたこの石は、天草にも独自の陶磁器文化を育てました。約30軒の窯元のうち、10軒ほどが天草西海岸に点在しています。白磁の器で提供される給食や、波で丸くなった陶石などに、石とともに生きる日常を感じることができます。また、煙が少なく火力の強い「天草無煙炭」は明治時代の主要産業として天草の暮らしを支えました。阿蘇の大噴火がもたらした加工しやすい「御領石(阿蘇火砕流堆積物)」は石垣や石柱、石仏などに加工され、風情ある町並みが訪れる人を魅了します。

ストーリーを伝える、おすすめの場所や体験

・白岩崎海岸 ・御領石の石垣 ・天草西海岸窯元めぐり ・烏帽子坑跡



入り組んだ天草西海岸の海路は、 唄や人、物資を運び、 港ごとの人情と文化を育んできた。

天草諸島は、九州本土と海を隔て、古くから東シナ海と日本列島を結ぶ海上交通の要でした。とくに天草西海岸の入り組んだ地形は、外洋を行き交う船にとって風待ちや避難の場となり、人と物が集まる海の結び目として機能していきました。中世には海上交通に関わる勢力が活動し、人流や物流を支えていたと考えられています。こうした往来は文化も運びました。島原・天草一揆後、天領となった天草では幕府の統治が行われ、海沿いの高台には諸外国の船を見張る「遠見番所」が築られました。江戸時代中期になると、「高浜焼」が長崎を經由してオランダなどへ輸出されます。1790年に崎津へ漂着した琉球王国の使節が感謝を込めて伝えたと言われる「杉ようかん」は、海の助け合いから生まれた味のひとつです。江戸時代、牛深港で生まれた「牛深ハイヤ節」は、ハエンカゼ(南風)に乗って全国へ広がり、各地で形を変えながら「海を渡った唄」として唄い継がれています。

ストーリーを伝える、おすすめの場所や体験

・牛深ハイヤ節 ・遠見番所跡 ・杉ようかん ・オランダへ輸出された高浜焼



南から渡ってきた作物と技、島の風土
天草西海岸に広がる営みは、
琉球・薩摩・長崎を結ぶ海上交易で育まれた
“甘みの経済史”を今に伝えている。

天草西海岸に刻まれているのは、地球の記録だけではありません。琉球から伝わったサトウキビと製糖技術は、薩摩藩の産業政策のもとで磨かれ、長崎商法を通じて国内外へと広がりました。その流れの中心にいたのが、屋号「松阪屋」を掲げた豪商・石本家です。石本家は、薩摩藩の砂糖流通を担い、長崎や大坂（現在の大阪）へ黒糖を運ぶ物流網を築き、天草を海上交易の重要な結び目へと押し上げました。その営みは、単なる商取引にとどまりません。石本家の五代目 石本平兵衛は、大飢饉の際に私財を投じて人々を救い、富を地域へ還元しました。また、赤崎村（現在の有明町）の前田市右衛門が薩摩から持ち帰った苗と製糖技術は天草西海岸へも伝わり、暮らしの知恵として島に根づいていきます。五和町の通詞島や御領、天草町の西平では、今もサトウキビが栽培され、収穫・製糖・分け合うまでを一体とする営みを通じて、海と島の育む文化が受け継がれています。

ストーリーを伝える、おすすめの場所や体験

・サトウキビ畑と収穫体験 ・黒糖ねり体験 ・黒糖 を使った飲み物や食べ物 ・本渡歴史民俗資料館



海・山の達人と、 外来文化やもてなしの心が 港ごとに異なる食文化を育み、 天草西海岸の風土と歴史を伝えている。

入り組んだ海岸線をもつ天草西海岸は、潮の流れや海底の地形が複雑で、港が変われば水揚げされる魚も、味付けも、食の慣わしも異なります。まだ交通が不便だった時代、人々は魚の屑や海藻、木灰を使って土をつくり、山・里・海を循環させる暮らしを築いてきました。今でも天草西海岸では、四季折々の野菜や果実に加え、天草大王や天草黒牛、各種ブランド豚が生まれ、港町には干物や雑節、練り物などの加工文化が根づいています。人が集えば、盛ん鉢(さかんばち)が並びます。コリコリとした食感のぶ厚い刺身や大皿いっぱい料理、食卓に並びきらないほどのご馳走は、「遠くから来てくれた人を精一杯迎えたい」というおもてなしの心の表れです。ちゃんぽんやこっぱもち、せんだご汁・ぶたあえ・たこ飯・まぜ飯・とさかこんにやくなどの料理は単なる郷土食ではなく、天草西海岸の風土と循環の暮らし、人を大切にしている精神を映し出す“語り部”のような存在です。

ストーリーを伝える、おすすめの場所や体験

・山盛りの刺身 ・黒糖ねり体験 ・牛豚鶏物を育てる風景